三重大学教育学部研究紀要　第54巻　人文・社会科学　(2003)　83 − 105 頁

# 実践的な人文主義: ラミズムと人文諸学問の勃興
## ― アンソニー・グラフトン、リサ・ジャルディン著『人文主義から人文諸学問へ、15、16 世紀ヨーロッパにおける教育と自由学芸』(ハーヴァード大学出版、1986 年) 第 7 章の試訳 ―

坂　本　弘　視

# Pragmatic Humanism: Ramism and the rise of 'the Humanities'
## — a Japanese version of the chapter 7 of *From Humanism to the Humanities, Education and the Liberal Arts in Fifteenth- and Sixteenth-Century Europe* by Anthony Grafton & Lisa Jardine —

Hiromi SAKAMOTO

この書をラミズムで締めくくるについては、二重の不可避性がある。最初に、理論的解明や理想主義的な決意よりも人文主義者の実践の把握に到達したいという主張を掲げるどんな研究も、あの技術に関して最も実践的で「応用を重視する」教育者であるペトルス・ラムス（ピエール・ド・ラ・ラメー）との取組みで失敗する事は出来ない。ラムスに関する広大な二次文献内には、確かにラミズムの強い影響力と重要さは教室の内側にあるという一般的な同意はある。そこで、我々は人文主義の名の下でルネサンス期の教室の中で実際に進行した事柄に対して、歴史家は、概して彼等の注意を今迄充分には払って来なかったと主張したけれども、ペトルス・ラムスの場合には、更に何もして来なかった。W.J. オングのラムスに関する先駆的な伝記的研究以来、16 世紀フランスを対象とする歴史家達が、その時代の学芸教育に対するラムスの、大半は悪評ではあったが、重要な貢献をした思想や文学への衝撃について、様々な方法で考察して来た。[1] 知的には、ラムスの著作の多くは混乱し独創性が無いが[2]、ラミズム（ラムス主義者）の教科書は桁違いに出版され、教育では成功しており、ラミズムの思考習慣の形跡は、フランシス・ベイコンやプレイアデ詩人と同じくらいに、多様な姿を取る同時代の著作の中に見

---

[1] For recent bibliography on Ramus see P.Sharratt, 'The present state of studies on Ramus', *Studi Francesi* 47-8 (1972), 201-13. The essential works are C.Waddington, *Ramus: sa vie, ses écrits et ses opinions* (Paris, 1855); W.J. Ong, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue* (Cambridge, Mass., 1958; reprinted New York, 1972); *R.Hooykaas, Humanisme, Science et Réforme: Pierre de la Ramée (1515-1572)* (Leiden, 1958); J.J. Verdonk, *Petrus Ramus en de wiskunde* (Assen, 1966) (English synopsis in Sharratt, 'The present state of studies on Ramus', 205-6). See also C.Vasoli, *La dialectica e la retorica dell' Umanesimo: "Inventione" e "Method" nella cultura del XV e XVI secolo* (Milan, 1968), 333-601; W.Risse, *Die Logik der Neuzeit* I (Stuttgart, 1964), ch.3; 'Die Entwicklung der Dialektik bei P.Ramus' *Archiv für Geschichte der Philosophie* 42 (1960), 36-72.

[2] See e.g. E.J.Ashworth, *Language and Logic in the Post Medieval Period* (Dortrecht, 1974); C.B.Schmitt, *John Case and Aristotelianism in Renaissance England* (Kingston and Montreal, 1983), ch.1; N.W.Gilbert, *Renaissance Concepts of Method* (New York and London, 1960; reprinted in 1963), chs.5 and 6; W.S. Howell, *Logic and Rhetoric in England, 1500-1700* (Princeton, 1956); L.Jardine, *Francis Bacon: Discovery and the Art of Discourse* (Cambridge,1974), 41-7. On the other hand, for evidence of Ramus' original intellectual contributions in specialist fields such as mathematics see Verdonk, *Petrus Ramus en de wiskunde*; N. Jardine, *the Birth of History and Philosophy of Science* (Cambridge,1984), 234-5, 267-9.

出される事は広く認められている。[3]

しかしながら、我々の主張する「人文主義」が「人文諸学」になった移行でのあの決定的な時期を追求する際に、ラムスに立ち帰る事は又避けられない。もし人が1550年迄に一つの同一であると見なせる運動としての「人文主義」が「人文諸学」(とその教授)になりおおせた事が事実であると認めるならば、ヨーロッパ中の自由学芸の教育機関内で、ラミズムのsuccès fou【並外れた成功】を理解する事が唯一可能であるとこの章で論ずる事となろう。人文主義を対象とする伝統的な歴史家達が彼ら自身の重大な前提の結果として満足の行く説明を与えるという目的で失敗するのは、当に彼等のラムスやラミズムの扱いに懸っていると、我々は言うだろう。と言うのは、彼等は迂闊にも、理想としての原理としては人文主義は衰えたけれども、カリキュラム上の実践としては人文主義が勝利したという見解に同意して来たからである。彼等は自由学芸が真の人文主義の持つ高い理想の戯画化であると主張する立場にいたので、自由学芸に対するラムスの知的貢献は陳腐でありふれたものであると力説した。しかし事実は、その事が人気を博し、西ヨーロッパの思想に忘れられない足跡を残した自由学芸教育の変形として存在している事である。人文主義を対象とする歴史家達にとっては、ラムスは16世紀の知的情景上一つの汚点であるが、教育史家にとっては、彼は標準化された教室での教育やベストセラーの教科書という時代を予告している。しかしながらこの書を通じて行なった我々の議論は、実際の知的生活でこの両者は分けられなかった。仮にラミストの「方法」が教育学上の成功話であっても、ラムスによって提供された理論上の支柱が知的な歴史家達を納得させるのに失敗するなら、われわれ自身その理由を探さなければならない。答を見出す為に事例研究の取組みを続け、活動面でのラミズムに関する三つの文書例を提供しよう。それはペトルス・ラムスその人と、ラムスの亡くなる前後直接する数年に亘ってパリで活動していた人文諸学の教師クロード・ミグノー、同じ期間(1573－5年)短期間ケンブリッジ大学で修辞学の教授として活動したガブリエル・ハーベイである。

ペトルス・ラムスは1540年代を通じて、哲学と雄弁の教育目的へ向けての同盟を主唱し、アリストテレスの権威に挑戦した事で、パリで悪名を挙げた。[4] 我々の現在の研究視野からすれば、これはヴァラやアグリコラの伝統、即ち、どっしりとキケロやクィンティリアヌスの方向に向けられて伝統的なカリキュラムに依存しない自由学芸教育の首尾一貫した計画を立てる関心を持った人文主義者の教育学の伝統、に属する位置であると見るのは難しく無い。実際に、形式論理と神学からアグリコラの弁証法と雄弁へと彼が主張する強調の転換の為に、この特定の系図を公然と打ち立てる事に、ラムスは自分でも熱心であった。1569年に「選集」として出版する当てがある自分の著作を改訂中に、ラムスは「ヨハンネス・ステュルムが初めてこれらの目覚しく楽しい弁証法の成果をアグリコラの学派からパリにもたらした」し、この事が彼に初めて人文主義者の弁証法の「有り余るほど豊富な」富を味わう事を可能にしたと思い出し

---

[3] For Ramus' influence on the poets of the Pléiade see P. Sharratt, 'Peter Ramus and the reform of the university: the divorce of philosophy and eloquence?', in *French Renaissance Studies, 1540-70: Humanism and the Encyclopedia*, ed. P. Sharratt (Edinburgh, 1976), 4-20; G. Castor, *Pléiade Poetics* (Cambridge, 1964). For Ramus' influence on Francis Bacon see Jardine, *Francis Bacon: Discovery and the Art of Discourse*.

[4] For details of Ramus' career see P. Sharratt, 'Nicolaus Nancelius, *Petri Rami vita*, edited with an English translation', *Humanistica Lovaniensia* 24 (1975); Waddington, Ramus; Ong, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*; Sharratt, 'Peter Ramus and the reform of the university'.

ている。[5] ラムスが同じ年にバスル出版によって見る事になる『弁証法』の注釈がある彼の同僚オマー・タロン版の中で、決定的な弁証法の特徴が次の様に注解されている。

> ルドルフ・アグリコラは『弁証法の考案（De inventione dialectica)』の第1巻で、この特徴づけをし、ラムスはこの点で彼に従いこの学問では特にアグリコラの到達点と張り合う程であったが、論理学研究ではラムス自身、アグリコラをソクラテスの論理学――そこでは科学同様にこの学問の実際的応用がなされている――についての古代学派の直後で、総てその後の論理学者の先頭に位置付けたいと望んだ。純粋な（genuine［germana］）論理学の真の研究は最初にゲルマニア（Germany［Germania］）で確立し、その後彼の弟子や競争者によって世界中に広まった事で、彼はアグリコラに感謝の念を公然と口にするのが常だった。パリのアカデミーは、ヤコブス・オムファロスとバーソロミウス・ラトムスの到達で最初にその成果を受けたが、取り分けてヨハネス・ステュルムの到達の成果が大きく、彼によって論理学という学問の利便性が最も充分に内容豊富に提示された。[6]

忠誠のこの特殊な組合わせが、ラムスに教育の改訂された計画の形態をめぐる同時代の知的論議に実践的に介入させるのは自然であり、その論議は実現性の高い議論としては文法と弁証法に中心があり、学校が生出すものを社会の有能で活動的な成員にするであろう学芸技術領域での熟達を目指していた。アグリコラとエラスムス学派の「新哲学」はutility【有用】を成功の為に学派の主要な基準にし、有用は個人を市民社会で責任の持てる有徳で活動的な成員とする様な能力を生み得る事を意味すると了解されている。彼の『パリアカデミアの1551年に向けた雄弁学の哲学の為に（Pro philosophica Parisiensis Academiae disciplina oratio of 1551)』、これは彼の生涯で充実していた時期に書かれたが、この中で当にこういった目的――この記述に関してはシャラットによる梗概を用いる――を達成する為にプレスルのコレージュ（Collège de Presles）に彼が導入した詳細な時間割を次の様に整然と提示し擁護している。

> 生徒は午前に5時間、午後に5時間教えられたが、何れの場合も古典の文献に関する1時間の講義、2時間のediscendi（徹底した学習）－これは研究や暗記に費やされる、そして2時

---

5 *'Hos dialecticos tam insignes tamque amabiles fructus Ioannes Sturmius ex Agricole schola Lutetiam Parisiorum primus attulit ... Illum logicae facultatis usum ... logicam istam ubertatem primum degustavi ...'* (*Scholae in liberales artes* (Basle, 1569), preface, 3); cit. N. Bruyère, *Méthode et Dialectique dans l'Oeuvre de La Ramée* (Paris, 1984), 305. On Sturm's dialectic teaching see A. Schindling, *Humanistische Hochschule und freie Reichsstadt: Gymnasium und Akademie in Strassburg, 1538-1621* (Wiesbaden, 1977). On the Basle publishing project of a collected works see Bruyère, *Méthode et Dialectique dans l'Oeuvre de La Rameé*, 19-22.

6 *'Hanc differentiam Rodolphus Agricola docuit 1.lib. de Inventione, quam P. Ramus sequutus est, sic ut aemulatus in hac arte inprimis industriam illius viri, quem in studio logico, post antiquam illam Socraticorum Logicorum scholam (in qua non minus usus artis, quam scientia tractabatur) omnibus postea natis Logicis anteponere solitus est, dicereque palam ab uno Agricola verum germanae Logicae studium in Germania primum, tum per ejus sectatores et aemulos, toto terrarum orbe excitatum esse. Percepit autem Parisiensis Academia primo fructum illum adventu Jacobi Omphalii, Bartholomaei Latomi: sed in primis Joannis Sturmii, a quo Logicae artis utilitas plenius et uberius est exposita'(Dialectica A. Talaei praelectionibus illustrata* (Basle,1569), 95; cit. Bruyère, *Méthode et Dialectique dans l'Oeuvre de la Ramée*, 305-6). As Bruyère points out, this edition of Talon's commentary of Ramus' *Dialectica*, revised well after Talon's death, by Ramus, during his stay at Basle, undoubtedly reproduces Ramus' own views on his works and their intellectual origins. See also Ong, *Ramus and Talon Inventory*, 190-1.

間の討議と練習によって構成された（26－7頁）。この順序の背後には、分析と源泉が創意に富む文章に導くという彼の理論がある（28－43頁）。この課程は7年半（7歳から15歳迄）続き、最初の3年間に文法と統語論があり、4年目に修辞学が来て、それに続いて論理学と共に tempus philosophicum（哲学期）が5年目に始まり、6年目に倫理学（アリストテレスの最初の4巻）と数学、即ち算数と幾何と音楽や光学が来る。最終の年は、気象学と若干の天文学を含む自然学（アリストテレスの最初の8巻）に当てられ、彼自身の『学生の自然学(Scholae physicae)』はこれについて殆ど触れていないけれども、「真の自然学に理性的な数学は基づく（Physicam veram, mathematicis rationibus fundatam)」と彼は自然学を考える。他の総ての科目同様に、自然学は文献を通して学ばれるが、この場合には、ウィリギウスの『Georgics（農耕詩)』やオウィディウスの『Metamorphoses（変身物語)』や何巻かのルクレティウス、セネカ、プリニウスであり（44－5頁)、科学と詩を合せるとすれば、必ず科学的な詩と言うよりも詩的な科学となる。最後に「名ばかりのものではなく本当に」学芸修士を終了するが、15歳に成長した時には、他の人々を教えたり法律や医学や神学を研究し、最後には社会において有用な役割を果たす心構えが既に備わっているとラムスは言う(49頁)。[7]

ラムスの議論を呼ぶ教育上の実践についての宣言、当然論争好きと見なされる1551年に「何故」という事には暫く判断を保留するが、この宣言は、パリの王立コレージュの哲学と雄弁術の教授にラムスが任命された将にその年に出版された。幸いな事に、勤勉な一学生の手稿ノートの中に、この輝かしい地位の在職権をラムスが初行使する際の講義に関する記録が有る。確かに、ラムスはこの講義を彼の教育に対する全体的な取組みを表わす物として考慮したに違いはなかろう。彼の教授職は、結局の所彼の為に新たに用意されたのであって、哲学と雄弁術は連携して進めるもので、アリストテレスの哲学は不必要に技巧的で、詰らない議論が多すぎるという彼独自の主張――この主張が強すぎてかなりの年に亘って哲学を教える事を禁止されていた――を実現する為であった。[8]

フランソア・シャンブュ François Chambut（フランシスクス・シャンブトゥス Franciscus Chambutus）は王立コレージュでのラムスの教授就任講演で始まる最初の課程に出席し、手稿による注を書き込んだ明示された教材類と、講義後にラムスによる注解を付けた出版された教材を製本にしていた。[9] 現在はアムステルダム自由大学の図書館にある、この本[10]には以下の文献が含まれている。

*Audomari Talaei Praelectiones in partitiones Ciceronianas*（missing title page, 1 and 2）4°, 19 pp.

*M. Tul. Ciceronis Oratio pro C. Rabirio perduellionis reo, Argumento illustrata.*

---

7 Sharratt, 'Peter Ramus and the reform of the university', 7-8.

8 For these and other biographical details see Ong, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*; Sharratt, 'Peter Ramus and the reform of the university'.

9 See R.Barroux, 'Le premier cours de Ramus au Collège Royal d'après les notes manuscrites d'un auditeur', *Mélanges d'histoire littéraire et de bibliographie offerts à Jean Bonnerot* (Paris, 1954), 67-72.

10 We are extremely grateful to Peter Sharratt for drawing the present location of these volumes to our attention.

*Parsiis, ex typographia Matthaei Davidis, via Amygdalina, ad Veritatis insigne*, 1551, 4°, 16 pp. With Chambut's manuscript commentary in the margins, written between a double ruled margin, and bearing the date of the beginning of Ramus' course.

*M. T. Ciceronis pro Caio Rabirio perduellionis reo Oratio, Petri Rami Regii Eloquentiae et Philosophiae professoris praelectionibus illustrata, Lutetiae, ex typographia Matthaei Davidis, via Amygdalina, ad Veritatis insigne*, 1551 4°, 41pp. +1 p. s. n. and 1 p. bl.

*M. Tul Ciceronis de Lege Agraria contra P. Servilium Rullum Tribunum plebis in Senatu Oratio I. Parisiis, Ex typographia Matthaei Davidis, via Amygdalina ad Veritatis insigne*, 1551, 4° , 14 pp and 1 p. bl. With manuscript commentary without place or date, in the same hand as the commentary on the *Pro Rabirio*, also written in the margins between two ruled margins, and on the final blank page.

*M. Tul Ciceronis de Lege Agraria contra P. Servilium Rullum Tribunum plebis ad populum Oratio II. Parisiis. Ex typographia Matthaei Davidis, via Amygdalina, ad Veritatis insigne*, 1551, 4°, 50 pp. and 1 p. bl. With a manuscript commentary, without place or date, in the same hand as the preceding volume, and similarly placed.

*M. Tul Ciceronis de Lege Agraria contra P. Servilium Rullum Tribunum pleb. ad populum Oratio III. Parisiis. Ex typographia Matthaei Davidis, via Amygdalina, ad Veritatis insigne*, 1551, 4°, 8 pp. With a manuscript commentary, without place or date, in the same hand as the preceding volume, and similarly placed.

*M. Tullii Ciceronis de Lege Agraria contra P. Servilium Rullum Tribunum plebis orationes tres, Petri Rami Veromandui eloquentiae et philosophiae professoris Regii praelctionibus illustratae, ad Carolum Lotharingum cardinalem. Lutetiae, Apud Ludovicum Grandinum, e regione Gymnasii Remensis, 1552, Cum privilegio*, 4°, 8 ff. s. n. +131 pp.

*M. Tullii Ciceronis in L. Catilinam Orationes III, Petri Rami, Eloquentiae et philosophiae professoris Regii, praelctionibus illustratae. Ad Carolum Lotharingum Cardinalem. Lutetiae, apud Ludovicum Grandinum, e regione Gymnasii Remensis. M. D. L. III.*, 4°, 141 pp. +2 pp. s. n.

*M. Tullii Ciceronis Paradoxa ad Marcum Brutum, Audomari Talaei commentatinibus explicata, ad Carolum Lotharingum Cardinalem. Lutetiae, cura et diligentia Caroli Stephani, M. D. L. I.*, 4°, 52 pp. [11]

小規模ではあるが、言わば、ここにラムスの教育実践がある。控え目に収集されたキケロに

[11] Ibid., 68-9.

よる初心者用の作品が一行ずつ、一節ずつ議論されており、この学生は特別に印刷された「ほんの僅かな」教材に注釈を書き込んでいる。その注解は充分に注意されており文法と修辞に亘るものであった。

> Perduellionis reo. Perduellis（戦う敵）は後ではhostis（敵、または余所者）と呼ばれる者に以前は用いられた単語であり、「その事実のどぎつさを和らげる表現の穏やかさ」を示す。キケロがOfficiaの最初の巻で言う様に、ここではpueduellio（ある国に対する敵意のある行為）は、擁護できない反逆罪【シャンビュはmaiestatisをmagistratusと聞き間違えている】であるか、国家または国家元首に向けられた敵意を唆した罪で告発された人物である。[12]

あるいは代わりに、その注解はその節の議論について、見てそれと判る「ラミスト」の方法で弁証法的な分析を提供している。

> キケロを動かしてラビリウスを擁護する気にさせた理由はクイリテス達を動かして無罪にさせたに違いない物と同一であるが、
>
> しかしながら、キケロは友情や、尊敬、人間愛、慣習、そして中でもコンスルとしての彼の才能の中では国家の福祉によって動かされる事となる。
>
> だからクイリテス達もその同じ理由で彼を無罪にする気にさせられたに違いない。[13]

何れの場合も、真面目な学生が聞いた通りに正確に記録が取れる様に、ラムスは充分にゆっくりと注解を口述した事は明らかであり、シャンビュが教室でのノートと一緒に綴じている出版された注解が、彼が誤って聞いた事は別にして、彼自身の物に著しく近い。上記の最初のノートでシャンビュは *hostis* を *hostes* と聞き間違え、だから彼は文法も間違えてしまったし、*maiestatis* を *magistratus* と聞き間違え、だから多分treasonの例が示す完全な【表現】力を駄目にし、as Cicero says in the first book of the *Officia* という文章を先行する文では無く、次の引用句、即ちin fact from the *Digest* に付けてしまった。言換えれば、印刷された文献は、その言葉に対して現役の論争的な教師の経験を捉えており、捉えていない事は、行動面で教師に従おうとして効果が無かった学生の試みである。[14] 実の所、印刷されたpraelectiones（講義録）と教師によって述べられた授業との驚くほどの近接性は、出版に際してラムスが狙った事の一つが「進行中の」彼の教授行為を、当にそれが為された様に「生きた姿で」捉える事であるように思われるが、生きた姿では、教室内の口述は現実には表わせなかった。この事が大学の殆ど総ての授業におけるラムスの中心的な著作、中でも『弁証法（the Dialectica)』の新しい

---

[12] '*Preduellis a veteribus dicebatur qui postea hotes* [*sic*] *dictus est, lenitate verbi tristitiam rei mitigante. Ait Cicero Officicorum primo: hinc perduellio crimen immunitum magistratus* [*sic*] *vel criminis hujus reus qui hostili animo adversus rempublicam animatus fuit*'. Cit. Barroux, ibid., 70.

[13] '*Summa huis exordii complexca* [*sic*] *syllogismo. Quibus caussis Cicero mouetur ad defendendum Rabirium hiisdem Quirites moueri debent ad absoluendum. Atqui amicitia, dignitate, humanitate, consuetudine, salute rei publice officio consulatus Cicero mouetur. Hiisdem igitur Quirites dommoueantur.*' Cit. Barroux, ibid., 71.

[14] For the printed versions of these two notes see Barroux, ibid., 70-1.

「版」が、何故印刷された出版物に由来するのかという説明を若干は前進させよう。[15] それはラムスが出版社との交渉で、この文献が彼の実践を完全に「描写している」様に取り計らせている事で判る。[16]

出版努力という現実的処理を続ける際に、ラムスは常に裁判、長老会議、平民集会、全員総会等の公的生活（public life: in forum, in Senatum, in concionem populi, in omnem hominum conventum）に向けての準備としての学問（と彼流の教育）に取組む方法の適切さを強調する。[17]

しかしながら他方で、彼に反対する人々は、その笑うべき浅薄さを強調する。ペトルス・ガランディウスは、ラムスの1551年の教育宣言に、以下のように主張する事で、この新欽定講座担当教授の便宜主義者らしい通俗化を激しく告発して反対した。

> 自分のガラクタを読む大多数の学生よ、（本の出版数を頭に入れないでくれ、ラムスよ）。ラムスと言えばそれから如何なる利益を引き出す積りも無いし、それだけでなく、滑稽なパンタグリュエルについてのフランスの書物が、恰もゲームか娯楽の為であるかの様に、そのガラクタが存在する事である。[18]

（ラブレイは、唯一の解決策として、この両者の「Petruses（側頭骨錐体）」を完全に「petrification（化石化する事）」を提案する事で答えた!）[19]

ギャランは、自由学芸の教育に対するラムスの取組み方を扇動的であり、哲学と雄弁を結合させる彼の試みは人を惑わせ、漠然としている事を次の様にはっきりさせる。[20]

> 彼は哲学が哲学者からではなく詩人から遥かに良く教えられると考える。哲学と雄弁のこの曖昧な連結の中で、彼はアリストテレスや哲学を全く教えず、代わりに教えるのは殆ど詩だけである。彼はアリストテレスに対して幾分は不敬虔で、幾分は揚げ足取りや見当違いな事柄で一杯にして論争をしているが、彼はアリストテレスが全く関わらないで置くか、概論や要約を通して読まれるべきで、そうでなければ個人指導教師無しで学生が行う勉強の一部に付託されるべきと主張する。彼は福音と哲学を混同し、未熟で無知な学生の精神を全く不当

---

15 See Ong, *Ramus and Talon Inventory*; Barroux, ibid., 70; Sharratt, 'The present state of studies on Ramus'.

16 On Ramus' stay at Basle, supervising Basle printings of his works, see P.G.Bietenholz, *Basle and France in the Sixteenth Century: The Basle Humanists and Printers in their Contacts with Francophone Culture* (Geneva, 1971), 153-63, 304-7.

17 P.Ramus, *Pro philosophica Parisiensis Academiae disciplina oratio* (Paris, 1551), 50-1, cit. Sharratt, 'Peter Ramus and the reform of the university', 8.

18 '*Melior Pars eorum qui hasce tuas nugas lectitant Rame (nec hinc tibi nimium placeas) non ad fructum aliquem ex iis capiendum, sed ueluti uernaculos ridiculi Pantagruelis libros ad lusum et animi oblectatioem lectitant*' (P.Gallandius, *Pro schola Parisiensi contra nouam academiam Petri Rami oratio* (Lutetiae, 1551), fol. 9$^{v}$). Cit. Sharratt, 'Peter Ramus and the reform of the university', 8; the 'Ramus Galland curriculum dispute, with commentary by Rabelais' is detailed in W.J. Ong, *Ramus and Talon Inventury* (Harvard, 1958), 496-8; Rabelais' treatment of the dispute is briefly discussed by T. Cave, *The Cornucopian Text: Problems of Writing in the French Renaissance* (Oxford, 1979), 214-15. For treatment of the substantial philosophical criticism made by Galland—that Ramus is an Academic sceptic—see C.B. Schmitt, *Cicero Scepticus: A Study of the Influence of the Academica in the Renaissance* (The Hague, 1972), 92-102.

19 Ong, op. cit., 498.

20 Sharratt, 'Peter Ramus and the reform of the university', 8.

な見解で汚している。[21]

同時に、彼は初期の人文主義的な伝統に彼が負っている――我々が見たようにラムス自身によって認められている事ではあるが――事でラムスの独創性の信用を傷付けようと次の様に述べる事も試みる。

> ロレンツォ・ヴァラ、ルドルフ・アグリコラ、ヴィベス、メランヒトンやアグリッパによって以前に教えられたり、研究の主題とされなかった事を君はこれ迄に行ったり書いたりしてきたか。[22]

我々はこの章を始めるに当たり、額面通りに「浅薄さ」や「独創性の無さ」の様な非難をしようとは思わないと示唆をした。我々が問うべき事は、競争相手はいつも独創性が無いのに「単に」普及者であると言う事で成功している教師達を咎め立てるものなので、ギャランは真に反対しているのは何に対してであるのかである。ギャランのかなりの語句は、逐語的に言えば、「(ラムスは) 福音と哲学を混同し、経験の無い何も知らない青年の心を全く不当な見解で堕落させている」の様に告げている。これらの言葉は不敬虔、頽廃、「不当性」を気付かせる。これらの言葉の背後に、当時の教育体系にラムスが引起こしている「崩壊」の容易ならざるものが横たわっている様に見える。[23] 何故この崩壊が現れなければならないのかを我々は自分自身に問わなければならない。ラムスの問題の立て方を廻り、定着している教師達を脅かし、彼等がそれを「風変わりな」とか「不自然な」とか「煽動的で混乱を引き起こす」として退けさせるどんな物があるのか。我々が最初に仮定する解答はその脅威が制度的な物であるという事でなければならない。ラムスは高度に学術的な教授の困難さと厳格さ (the difficulty and rigour of high scholastic schooling) を故意に不要な物として捨てたので、教育を研究や神学論争の生活への準備としてよりも社会的地位への手段と見なす人々を引付けていた。そうする過程で、必ずしも慎重では無かったけれども、はっきりと人文主義者の教育を最終的に「世俗化するという課題」(the final secularisation of humanist teaching)、即ち「人文主義」から「人文諸学問」への移行を成し遂げた。彼は教育についての試金石として、それがはたして「有用である」事を示すかを提案するが、それは教育がそれを受ける者に大学を出てから使う事の出来る技能で報いるべきであるという事を意味した。だから彼は、彼らの子息の教育に懸けた「投資 (investment)」から金銭に見合う価値を得る事を固く決心した商人階級の賞賛を得たし、この商人階級は、大学当局が彼を解任しようとした時に、ラムスを支持し続けた。[24]

ラムスは真の研究生活には足りないけれども、一定の知的能力に達したいと努力している学

---

21 '*Ex poetis philosophiam quam ex philosophis multo melius doceri contendat: in hac umbratili philosophiae et eloquentiae coniunctione, non Aristotelem, non philosophiam, sed poetas fere tantum doceat; Aristotelem paetim rerum captiosarum et inutilium, vel non attingendum, vel per compendia quaedam et summa tantum capita legendum, vel etiam discipulis citra praeceptoris operam committendum esse affirmet; evangelium cum philosophia confundat prodigiosisque omnino opinionibus imperitos et incautos adolescentes imbuat*' (ibid., fol. 3$^{r}$); cit. Schmitt, *Cicero Scepticus*, 93.

22 '*Quid a te dictum scriptumue, quod non ante a Laurentio Valla, Rudolpho Agricola, Viue, Melanchthone, Agrippa, uel traditum sit, uel in disquisitionem reuocatum?*' (Gallandius, *Pro schola Parisiensi contra nouam academiam Petri Rami*, fol. 9$^{r}$).

23 The various specific controversies are catalogued in Ong, op.cit., 492-533.

生を混乱させる伝統的な講義が持つ特定の傾向に対しては次の様に一貫して反対をした。

> 目下私の議論は秩序にではなく有用性に関係している。偉大な評価を受けている多くの書物の中に散在し、普及した学芸を探究する責め苛まれる努力をする事と比べても、少年にとって数少ない教訓によって一つの学芸を学習し記憶する事は遥かに易しいというものでもないと言うのでしょうか。[25]

哲学における重大な分析を要する問題を解くというより、最終的には公共の活動の舞台での論争に従事する事が目的である学生の教育内容としては、スコラ哲学という機構は全く不適切であると次の様に言う。

> この混乱、この詭弁、この不可解な物、この途方も無い夢の魔力が貴方達から貴方の判断と貴方の理性を奪って来た。出来る事なら、時折自分自身と協議をしてこの勉強がどんな良い事を貴方に与えるのかを自分自身に尋ねなさい。私が自分の学生を、そして何よりも自分自身を名詞や動詞、「定型命題」、「不定型命題」、法助動詞に関する千もの議論で不安にするのを学ぶ機会を持ったが為に、それ故に一体全体人類に価値あるどんな事を私は学んで来たのか。向こう見ずの友人に助言をし、苦しんでいる者を救い出し、制御されていない者を抑制する為に、このガラクタを用いる事が出来ようか。逆である。邪悪な人を告発し、解明できない犯罪で判事達を刺激する為に私が法廷に申し立てたり、罪の無い者を擁護して罰から解放する事を試みる事ができるだろうか。殆ど難しい。そんな事をして何になる。これ迄どんな有益な考慮も入る事が許されなかった貴方方の学校から問題は出ており、ここで悲劇的に浪費してきた全時間に見合った成果を求めているのである。[26]

ラムスは伝統的な教育が持つ詳細で複雑な様式の代わりに、知識伝達の為に一種の万能技法（悪名高い unica methodus）を提案した。彼の「唯一無二の方法」は如何なる学問の内容を伝達する場合にも適切に発揮できる手段であると彼は主張した。これが正当な意見であるとか道

---

[24] It is generally acknowledged that the composition of university students charged in universities throughout Europe during the sixteenth century. For an account of the numbers and class backgrounds of university students in Oxford in the latter half of the sixteenth century see L. Stone, 'The size and composition of the Oxford Student Body 1580-1909'in *The Universities in Society*, vol.I, *Oxford and Cambridge from the 14th to the Early 19th Century*, ed.L. Stone (Princeton, 1974), 3-110; J.K. McConica, 'Scholars and commoners in Renaissance Oxford'in *The Universities in Society*, ed. Stone, 151-81.On changing patterns of endowment see V.Morgan, 'Cambridge univeersity and "the country" 1560-81'in Stone, op.cit., 183-246.

[25] '*De ordine iam nihil disputo; de utilitate disputo; an non est longe, multoque facilius puero paucis monitis artem discere, memoriaque complecti, quam tot libris dissolutam, dissipatamque laboriosissime, et molestissime persequi?*' (*Aristotelicae animadversiones* (Paris, 1543), fol. 26v); cit. Vasoli, *La dialettica e la retorica*, 358.

[26] '*Haec confusio, haec sophismata, haec aenigmata, haec chimericae somniorum fascinationes rationem, iudiciumque vobis eripuerunt, adhibete aliquando vos in consilium, si potestis et vosmetipsos sic interrogate, quid me labor hic adiuvat? An quia de nomine, verboque, de pronunciatis finitis, infinitis,modalibus, discipulos meos mille argumentis perturbare, et meipsum in primis didici, ideo dignum homine quicquam didici? At his adiutus nugis potero vel amicis inconsideratis consilium dare, vel afflictos molestia levare, vel affrenatos reprimere? nihil minus. An in foro caussas agere, improborum nomina deferre, sceleribus explicandis indices commovere, an innocentes tuere et supplicio liberare? Nihil simile ... Quid ergo est? Egredere e schola tua, in quam cogitatio utilitatis nulla unquam ingressa est, require tanti tempolis quantum hic misere consumis, fructum*' (ibid., fol. 37r-37v); cit. Vasoli, *La dialettica e la retorica*, 360.

理の通った意見であるかどうかという問題は、近年絶え間無く注目を得て来ているので、脇へ置いておこう。[27] 教育の目的が道徳的に価値を高める事ではなく、情報や各種技術を提供する事にあるという展望を彼の方法が切り開いたのであり、ラミストの教育法を採用すれば、貴方を優秀な文法家や数学者にする事は出来るけれども、善良な人間とする保障は無いという事となった。言い換えると、ラミストの方法は学芸教育のイデオロギーとして言外の意味を持ち、その方法自身による「向上」とか「下降」という些細な小事を遥かに超えてしまった。しかしこの事も推論の域を出ないので、伝統的な道徳教育とのその様な断絶の形跡を見付ける事が出来るかどうかを調べる為に、行動面において別の一ラミスト教師の例で見る事としたい。

1978年にプリンストン大学は、パリで1550年から1572年の間に出版された古典の文献のパンフレット版であるSammelband（古典文献教材選集）という物を入手したが、それは総て1570年代初期にパリ大学で為された講義の上に学生が書き入れた、行間や欄外、綴じ込まれた間紙等への覚え書きによって花綱状に覆われていた。[28] この講師はクロード・ミグノウであるが、恐らくラテン名であるクラウディウス・ミノスの方が良く知られていた。[29] 1536年頃にディジョン近くで生まれ、7年間彼が言うところの「paedotriba（学校教師）の耐え難い境遇」の中で過ごした。[30] 1567年迄にペストに関する地方医師の本に極めて僅かの詩等を寄稿していたが、同年の夏にパリに出て来た。[31] ギリシャ語と哲学を猛勉強した学生であったが、1570年迄にパリのコレージュ・ド・ラーンス（College de Reims）で人文諸学の教師になっており、そこでアルキアトの紋章学（emblem-book）について凝りに凝った注釈を完成させた。[32] 1572年と1573年にかけて、近代を扱う教師に同情と恐怖心を与える程に、分野、様式、歴史的文脈において非常に多様な古典文献に基づいた講義を行なったが、それはキケロの『De optimo genere oratorum（最高の弁論家について）』、『Topica（トピカ）』、『De finibus 〖bonorum et malorum〗（善悪の究極について）I』、『Academica（アカデミカ）I』、『Somnium Scipionis（スキーピオーの夢）』、『Philippics（フィリピックス）I-II』、『Catilinarians（カティリナ弾劾）I-II』、プリニウスの『Natural History（博物誌）VII』ユスティヌスの『Epitome of Pompeius

---

27 On Ramus' 'method' see the bibliography above, notes 1 and 2.

28 For a good brief description of the collection, see William Salloch, *Catalogue 353: The Classical Heritage, Part I*, 9-10. Another brief description and a reproduction of a page appear in the *Princeton University Library Chronicle* 41 (1979), 76-8. For a full list of the books in the collection see Appendix 1, below, pp. 201-2.

29 On Mignault, see the article from Papillon in Niceron, *Mémoires pour servia à l'histoire des hommes illustres dans la République des lettres*, 14 (Paris,1731), 81-99, and the articles in the *Biographie Universelle and Nouvelle Biographie Générale*.

30 'Minos lectori', in *Omnia Andreae Alciati V.C. Emblemata cum commentariis, quibus Emblematum omnium aperta origine mens auctoris explicatur, et obscura omnia dubiaque illustrantur per Claudium Minoem Divionensem* (Antwerp, 1577), 17 (... *ad miseram paedotribae conditionem*').

31 For Mignault's liminary verses, see Claude Fabri, *Paradoxes de la cure de peste* (Paris, 1568), sigs. [*vii$^{v}$-*viii$^{v}$]; the privilege is dated Paris, 30 May 1567; the preface, Dijon, 1 September 1567; and the volume itself was, according to a legend on the verso of the title page, 'Achevé d'imprimer pour la premiere fois le 29. d'Octobre 1567'. For Mignault's move to Paris, see Mignault to Philibert Colin, 3 August 1567, in Pierre Palliot, *Le parlement de Bourgongne* (Dijon, 1649), 187-8.

32 The first edition of Mignault's commentary was published in 1571 by Du Pré, who also published several of the pamphlets in the Princeton collection. See Henry Green, *Andrea Alciati and his Books of Emblems: A Biographical and Bibliographical Study* (london, 1872), 92-3, 195-6, 216-17; George Boas, tr. *The Hieroglyphics of Horapollo* (New York, 1950), 36-40; A.Camerero, 'Teoría del símbolo, empresa y emblema en el humanismo renacentista (Claude Mignault, 1536-1606)', *Cuadernos del Sur* 11 (1972), 63-103.

Trogus（ポンペイウス・トログスの摘要）I』、ホラティウスの『Odes（オード）II-IV』、『Ars Poetica（詩論）』、『Epistles（書簡集）』、アウソニウスの Griphus Ternarii Numeri、ルキアノスの『On Not Believing Calumny Rashly（罪人呼ばわりを軽率に信じない事）』、プルタルコスの『Moralia（英雄伝）』からの3つの小論文、デモステネスからはリバニウスによる議論を載せた『On the Peace（平和について）』、イソクラテスの『Against the Sophists（反ソフィスト論）』、ローマの作家や作品についての便覧、弁証法の手引きに及んでいた。

初めからミグノーは根本的な問題に直面した。彼は教えたいと思う文献を学生に供給しなければならなかった。それについて講義するのと同じ位その文献を学生に口述させたりしたら、考えられない程に長ったらしくて退屈な事になってしまうからであった。[33] 従って、彼は数件の印刷屋を用いて、もっとも頻繁だったのは Du Pré や Brumen だったけれども、個人用に使う文献のパンフレットを印刷していた。しばしば使われた文献で印刷された版が用意されていた場合には、学生は容易にそれを購入すれば良かった。[34] これらは批判版ではなかった。その無名の編者は文献に関する問題には面倒を見なかったし、異なる読み方を記す事はめったに無かった。しかしながらいずれにしても原文だけで終ることは無く、大抵は短い走り書きの注を載せていた。一つの例で十分だろう。例えば『オード』の3.1の場合、それは48行の長さのものであるが、我々の無名の学生版では二つの注がある。最初のものは全体としてこの詩の導入になった。

この本に対して序の役割を果たすこのオードの中で、彼は青年に聖なる教訓を授ける。

と言うのも、彼が言うには、人は異なる境遇と願いを持つからである。しかし誰でも幸福を求めて励み、また誰でも死ぬ様に定められている。この故に統治者達も、普通の人より幸運であると言う訳には行かないが、それでも彼らはより良く生きている。と言うのも幸福はその様な事には無く、安全保障と精神の平和にあり、それは普通には普通の人の分け前で、偉人には無い。そして又、大洋に聳える建造物によっても利益を得る事は無く、唯彼らに気掛かりを増すだけである。最後に彼は言う。絢爛豪華な衣装をもってしても悲しみを追い払え

---

33 In cities where the printing trade was not well developed, dictation of every text long remained necessary. See e.g. Jean de Gaufreteau's description of the situation in Bordeaux, where until 1578'...les secoliers escrivoyent leurs textes, ce qui leur estoit une grande peyne'. Quoted in Louis Desgraves, *Elie Vinet, humaniste de Bordeaux (1509-1587): vie, bibliographie, correspondance, bibliothèque* (Geneva, 1977), 24n. 159. On the production of editions for the student market in sixteenth-century France, see also Ong, *Ramus and Talon Inventory*; M.Mund-Dopchie, 'Le premier travail francais sur Eschyle: le Prométhée enchaîné de Jean Dorat', *Les lettres romanes* 30 (1976), 261-74, a use ful case study.

34 It is not possible to determine which of the texts in the Princeton collection were definitely printed at Mignault's behest. He had come into contact with Paris printers and learned to detest their greed by 1567, when he wrote as follows to Colin, for whose poems he had tried to find a publisher: '*Vt autem me apud te promissis exolvam, bonam partem typographorum qui hic agunt iam agnovi satis, qui nihil eiusmodi excudunt, nisi numerata pecunia, videoque apertis oculis eos maxime et praeter modum rei familiari esse deditos. Continuo enim videre est eos Doctorum precibus vix aut rarissime flecti posse ...*' (Palliot, *Parlement de Bourgogne*, 188). It is thus possible that any of the works printed after 1567 — e.g. the Ausonius of 1569 — were done for him. It seems quite likely that he is responsible for several of the items printed by Brumen and Du Pré in 1570 and after. And it seems quite clear that he did not have the items printed that appeared before 1567. At least some of the books — e.g. the *Somnium Scipionis* of 1565 — were reprints of well-established teaching editions and could have been commissioned by almostanyone.

ないなら、彼のサビーネの農園をそんな物と交換する理由が彼には全く無い。[35]

第二の印刷された注は41行にある成句を扱っている。

フィリギアの石（Phrigius lapis)。シンナダの大理石で、注解者はこれをフィリギアの町シンナダからこれを理解している。しかしプリニウスはその石について36. 19で異なる見解を持つように見える。[36]

いずれの注も独創的なものでは無い。最初のそれは、このオードに対する標準的な議論で、ミグノー自身という事も大いにあり得るけれども、この編集者が以前のどの版でも探し出す事の出来るものであった。二番目に関しては、スイスの学者グラレナスが同一の行について言わなければならないとした文章をここに記す。

アクロとポルフィリオの両者（注釈者）は、フィリギアの石はシナデカの大理石で、フィリギアにあるシナダの町から来たもので、ストラボとプトレミィによって言及されている。しかしプリニウスは、この章の最後に、36. 19にある石について異なる見解を採った様に見える。私としては、この点を読者に指摘し、他でもして来た様に読者に判断する事を委ねたいと思うのみである。[37]

編集者は明らかにグラレアヌスの注を採りそれを要約した。彼はプリニウスの逸脱した意見はどういう物かを理解するために、プリニウスの36. 19を読むという労を採りさえしないで、グラレナスの参照文を唯写すだけで先に進んだ。実際に『オード』のこの版を通じて正確に、伝統的な議論とかなりの数のグラレアヌスによる特定の注との同一の結び付きを見出す。恐らく編集者は標準的な議論を載せたホラティウスの一冊を取り、グラレナスの中で見付け好んだ内容について摘要を書き込み、それを印刷屋に送っただけであろう。ミグノーと彼の同僚はキケロからアウソニウス迄の範囲で他の編集に対しても同じ事を多くしたと思われる。

当時ミグノーの非常に多くの時間が、こういった小規模の版を作るのに使われ、編集する文献を探し、一定の見直しをし印刷屋に回すという作業を必要としたに違いないし、更に言えば、現代の教師同様に、多くの教師はシラバスや一次資料からの抜粋の作成や複製に多くの時間を

---

35 Printed *argumentum to Odes* 3.1; *Q. Horatii Flacci carminum liber III* (no publishing information given; cf. Appendix 1 below, no. 14), fol. 31$^{rv}$: '*Hac Ode quae prooemii vice in sequentem librum esse possit, sanctissimis praeceptis teneram aetatem imbuit. Nam quum, inquit, variae sint hominum conditiones: alii aliis studiis, sed omnes ad felicitatem contendant, et aequa sit omnibus mortis conditio, privatis nihilo sunt feliciores satrapae, quamlibet laute pascantur: felicitatem non in eiusmodi sitam, sed in securitate et animi tranquillitate,quae plerunque mediocrium fortunam comitatur, extreme potentium non ita: neque prodesse, quod in mar*[*i*] *aedificent, quo aeque ascendunt curae. Demum ait, si purpura et vestes splendidae dolores non pellunt, non est quod illas velit permutare cum fundo suo Sabino.*'

36 Printed note to Odes 3.1.41; ibid., fol. 31v: '*Phrygius lapis, Synnadicum marmor, Commentatores intelligunt, a Synnada urbe Phrygiae. At Plin. lib.36.c.19. aliter de eo lapide sentire videtur.*'

37 '*In Q. Horatium Flaccum Henrici Glareani Helvetii, Poet. Laureati Annotationes*', *in Quinti Horatii Flacci Poemata amnia (Freiburg i.B., 1549), separately paginated, 35: 'Per Phrygiam lapidem et Acron et Porphyrio Synadicum marmor intelligunt, ab urbe Synada Phyrygiae. Cuius urbis Strabo lib. xii. meminit non ita longe a fine: meminit et Ptolemaeus. At Plinius lib.36. cap.19. aliter de eo lapide sentire videtur, ad finem prorsus eius capitis. Quod lectori indicare duntaxat volui, ac ipsum suo relinquere iudicio, ut in aliis plerisque facimus.*'

費やした事だろう。Du Pré や Brumen（という印刷屋）は、ゼロックス機器やオフセット印刷の 16 世紀における等価物であった。[38]

ミグノーはコレージュ・ド・ラーンス（College de Reims）の第 1 級（primus ordo）即ち最上級（the highest form）の学生を教えた。[39] しかし彼はそれまでの級（the lower forms）で文献を完全に読む事を学び終わっていないと想定していた。数人の学生は最上級に達するのに 1 年程度しか懸けなかったので、多分賢明だっただろう。[40] かれはそれぞれの文献の逐語的な意味について学生が理解する事を確実にする事で始めた。作品が散文であれ韻文であれ、ラテン語であれギリシャ語であれ、戦争についてであれ神学についてであれ、それをそっくり一語ずつラテン語に別の言葉で易しく言い換える事で始めた。彼の講義を記録した学生、ジュラルディス・ド・メール（Geraldus de Mayres）は印刷された教材の行間にちっちゃな文字で彼の言い換えを几帳面に書き上げた。実際場面におけるミグノーの例として、我々は『オード』の 3. 1 に戻る事にしよう。37 から 40 行はメールが使用した教材では次の様に読める。

sed timor et minae
Scandunt eodem quod [sic] dominus: neque
Decedit aerata triremi et
Post equitem sedet atra cura.

（しかし恐怖と悪い兆しは等しく威圧し、暗鬱の不安は青銅色の船を離れず騎兵の背後に居座る）

この行間に Mayres に次の様に書いた。

metus perturbationes
sequuntur quocunque eum qui est animo perturbato
relinquit hominem in navi
sequitur hominem quantumvis equis instructum tristis
solicitudo.

明らかにミグノーは連続する散文の言い換えを、完全な複数の文章にして口述した。彼の学生は彼が話す同じ速さノートを取る事は出来なかった。そこで彼らは明白な単語は選択的に省いた。例えばここで 38－9 行は、明らかに否定文で、恐怖は青銅色の船を離れない。ミグノーの言い換えも否定であったに違いない。しかしメールは*non*か他の簡単な *neque* に代わる言い替

[38] One qualification should be made. Evidently Mignault did not see to it that his pupils always had the same printed text before them as he did－at least when it came to Greek, for which he used very short texts printed on one or two leaves. For in a comment on Demosthenes, *On the Peace* 7, he parses the verb *êkousate* (*'a verbo akouô'*) as first aorist; but his student's printed text in fact read as *êkouete* which is imperfect. On the whole, one suspects that such discrepancies were more common in Greek teaching than in Latin; but it would be useful to have more information.

[39] The place and times of Mignault's lectures are specified in a number of subscriptions by the student who took the notes in the Princeton volume, Geraldus de Mayres; for these see Appendix 2 below. The form most of them take (*'Annotationes ... datae* [or *dictatae*] *a domino Minoe ... in primo Rhemensium ordine'*) seems to indicate that the notes were taken by a student at public lectures. So do a large number of slips in the notes proper.

えを、それ無しでもその行を理解する自信があると知っていたので省いてしまった。この種の急いでノートを取る事が、学生の活動の主要な部分であったに違いない。

ミグノーの言い換えは総て単に字句にこだわるだけのものでも無い。時には教室の外では思いもよらない陳腐な水準に闘いを挑むが、この例ではホラティウスのどうにも忘れられない心の像、Post equitem sedet atra cura、「暗鬱の不安は騎兵の背後に居座る」は「悲しい心配事は人を追い駆けるが、多くの馬に彼は服従する」に変えられている。時にはまた、文献を開くのと同じ程、文法を強調するために、言い換えが使われる。例えば、デモステネスの『平和について』に対するリバニウスの議論は、*Mēkunomenou tou polemou*（「この戦争は延長され続けた」）で始まる。これをミグノーは prorogato bello cum bello prorogaretur つまり「この戦争は延長されたので、この延長されている戦争」と表現した。[41] ここで、ギリシャ語の絶対属格とそのラテン語の同義語に関する失われた課程について、ほのかな反響を受け取る人もいるだろう。しかし大部分の場合、単調さがその日の調子だった。

別の言葉で易しく言い換える事も始まりに過ぎなかった。長年の伝統によって、教師は更に多くの事をしなければならなかった。彼以前のグアリーノやエラスムスの様に、ミグノーは文献を一まとまりの物として、つまりその著者を見分け、その文献が登場した状況を述べ、その文献が区分される形式を決める様に、提供すべきであった。更に特に討議させるためにかなりの数の興味深い箇所、例えば学生の性格を形成するのに役立ちそうな啓発的な逸話、十分に良い活気が与えられそうな斬新な出来事、彼らの思想の表現法に美を添えるに役立つ気品の高い言葉遣いや簡潔な手本等を選定することを要求された。[42] この事を『オード』の 3. 1 に対してするのを見てみよう。彼は全体的な要約で堅実に始めるが、それは至高の感情や、少々愚鈍以上の物に満ちた、道徳的に解釈する修辞法の素晴らしい作品でもある。

> ホラティウスは祝福された人生を論じる計画をたてる。そんな人生を誰もが手に入れたいと望むが、そこへ辿る道筋には誰も気を配らない。初めに彼は、考えが不純だったり、下劣な人に、この研究から離れろと警告するが、冒涜する人を神聖な奥義から離れさせるのと同じである。次に人の様々に異なる境遇は総て神の統制下にあり、総ての人は死ぬ様に等しく運命づけられている事を説明する。この一つの思想が凡ゆる獰猛な感情と野蛮な欲望を抑制する。最後に似ていない事柄を素晴らしい帰納法を通した比較によって、人は祝福された人生を富や名誉や財産や機会次第の他の事を通してでは無く、精神の静穏によってだけ手に容れる事を教える。[43]

それから彼は社会的慣習から見て討議する価値があると思われる箇所を約束通りに注釈する為の抜粋へ進む。彼はホラティウスの Virginibus puerisque canto「私は少女と少年に向けて歌おう」の中に道徳的な論議用に多くの口実を見出す。

---

[40] R.Chartier, D.Julia, and M.Compère, *L'éducation en France du XVI' au XVIII' siècle* (Paris, 1976), 172-3.

[41] Mayres's note actually reads '*progoratetur*'.

[42] For a good summary of what was expected, see Erasmus, '*De ratione studii*', *in Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami* (Amsterdam, 1969－), I.2, 136-46; see also above, Chapter 6.

[43] For Mignault's comments on *Odes* 3.1 and their sources, see Appendix 3 below, where they are reproduced in their entirety.

少年が良い行いと躾を最初に習う事は非常に重要である。
彼らは大抵の事を幼い時に学習した事柄に近づけて考え勝ちである。

彼は3と4節の中にローマの制度に関する歴史的に興味のある事柄を発見する。「campusによってホラティウスはカンプス・マルティウス（Campus Martius）を指しており、そこでローマ人は規則的に集会や、行政長官を選任するcomitiaを開催した。」27－8行は星の名前と特性に関する短い論考への口実に使われ、35行は「三種類の石から建物は造られる」という余談にきっかけを与える。最後に2行において、favete linguisという句について社会的慣習に合った言語学上の注釈に対する理由を見出し、それをオウィディウスからの対句によって説明する。注解においてしばしば為された様に、事実ここで、ミグノーの議論はホラティウスの語句が持つローマ文学の伝統上の位置と、その宗教的起源をも立証する補説へと拡大される。

教師が何か記憶に残る有用な事柄を掛ける仮枠の様な文献の利用法は我々が見て来たように全く伝統的なものである。それが以前の注釈者にミグノーをすっかり頼らせるのである。この例ではミグノーが、主としてホラティウスについてのデニィス・ランバン（Denys Lambin）による優れた編集を利用しており、僅か5年前に出された改訂版である。例えば、導入の述べ方、favete linguis（最高の好意を持たれてきた様に言語に対する）という句についての議論、カンプス・マルティウスの扱い方において明らかで、ランバン（Lambin）の本の中で見出した事を単に要約したり拡充するだけで、時には同一の単語を正確に用いてさえいる。余談の癖と依存の癖は共にミグノーの他の講義をも同じく特徴づける。例えば、キケロの『De optimo genere oratorum（最高の弁論家について）』の課題（lesson）は、「悲劇（tragedy）」、「喜劇（comedy）」、「酒神ディオニュソス賛歌（dithyramb）」という用語についての長い語源や語句の説明で始まるが、総てキケロによって使われたものである。[44] これらが同一の文献に基づいて広範囲に亘り非常に造詣の深い注解の中でこの同じ単語についてラムスが述べていた事を要約する。[45] 勿論、彼が借用したからとてミグノーに対して責めを負わせられない。そうした事は全く普通に行なわれていたから。結局他の方法で一人の学芸教師が、多くの異なる文献に基づいて、一日に2から3の講義を提供する事が出来たであろうか。

しかしある意味でミグノーは極めて選択眼のある剽窃者である。彼はランバン（Lambin）から掠奪しているが、彼は自分が借用するものと典拠から不要として選ぶものには注意深い。favete linguise（『オード』、3. 1. 2）という句に相当する注を考察してみたまえ。ミグノーはラ

---

[44] Here, for example, is Mignault' gloss on the word 'tragici' in *De optimo genere oratorum* 1.1: '*Tragici poetae res tristes et calamitosas quae magnis et sublimibus personis feruntur accidisse, tractant, nomenque habent apo tou thragou hoc est ab irco. Quo pertinet illud Horatii: carmine qui tragico vilem certavit ob ircum ...*' Verso of title page, *M.T. Ciceronis Liber de optimo genere oratorum* (App. 1 below, no.1).

[45] Here is Ramus' gloss on the same word: '*Tragici, Tragoedia fabula est regum et principum mores exprimens: et miserabiles exitus habet, ut caedes, exilia, ruinas civitatum: dicta* apo têsôidês, *ab hirco et cantu, quia praemium eerat huic carmini hircus: vel apo tês trugos a faece, quia actores hujus fabulae, faece perungerentur: de quo utroque sic Horatius in Arte: Carmine qui tragico vilem certavit ob hircum.*' Peter Ramus, *In Cicernis orationes et scripta nonnulla, omnes quae hactenus haberi potuerunt praelectiones* (Frankfurt, 1582) 671 (the commentary on the *De optimo gener oratorum* first appeared in 1557). The line from Horace is Ars poetica 220. Admittedly Mignault could have found his definition and etymology of tragedy elsewhere (e.g. in the scholia of Porphyrio and Pseudo-Acro *ad loc.*), but the consistency with which his notes resemble Ramus' suggest that he was boiling the latter down. Ramus' source on tragedy may well have been Iaonnes Britannicus' comment on Ars 220, for which see *Horatius cum quinque commentis* (ed. Venice, 1527), fol. CXLIIII$^{r}$.

ンバンから句の説明と、それに対する証拠であるFestusに関するパウルス・ディアコノスの典型からの引用とを二つながら採っている。しかし彼はランバンの方法で最も特徴的なもの、即ち、ギリシャ語の単語euphêmeite（ευφαμειτε）はラテン語のfavete linguiseに正確に対応しているとの示唆を省いた。実際『オード』を通してローマの詩文の読者に対するランバンの特別な贈物であるギリシャ語の相当句を継承出来なかったが、それが最も顕著なのは、多分8行目の場合で、そこではcuncta supercilio moventis（「世界を眉毛一本で動かす」）ジュピターという句は有名なホーマーの一節から採用されている、というランバンの指摘についてミグノーは一言も無い。そしてこれが偶然の事では無い。短い比較をするだけで、ホラティウスについての講義を通してミグノーは様式、用語の選択に関する事柄、中でも、何かのラテン語の単語や句をギリシャ文学の伝統の中に位置付けようとするランバンの解説の大多数を除外した事を明らかにする。非常に驚くべき一例は他の文献から判る。『詩論』の136葉以下（136ff.）で、ホラティウスは詩人に如何に詩作を始めるかについて教示している。詩作の適当な例として次の様な2行連句を引用する。

Dic mihi, Musa, virum, captae post tempora Troiae,
qui mores hominum multorum vidit urbes
（141-2: 教えておくれ、詩歌の女神よ、その男の人について、その人は、トロイの都市が占領された後で、多くの都市と多くの人々の慣習を見て来たのだ）。

ホラティウス自身が明かしている様に、彼は『オデッセイア』の書き出しを訳している。自尊心の強いルネサンスの教師や注釈者に対してなら、誰だってギリシャ語の原典を引用し、更に恐らくホラティウスがその詩歌に関して一行を除外したと指摘する事を確実に期待した事だろう。[46] ランバンはギリシャ語から一部分を引用しただけではなく、その行文を、フランスは今やホーマーに比較するに足る叙事詩の詩人を持った事を示す為に、フランス語とラテン語でロンサールの『フランシアード』一部を引用する機会とした。[47] ミグノーが言及すべきであると考えた全てをここに記そう。

Dic mihi（教えておくれ）これがホーマーの『オデッセイア』の書き出しで、全作品の目的を述べ、その中でユリシーズは彼の様々な貢献と多くの経験という見地から描写されている。[48]

この点で、またホラティウスについての講義や他の箇所でもこれと似た非常に多くの例があるので、注解ではその様な教師が携わる事を期待したいと思う、今幾つかの例で充分に見て来た、様式に関わるような注解を、ミグノーは良く考えた上で除外していると我々は気付かなければならないのだろう。

---

46 See e.g. *Francisci Luisini Vtinensis in librum Q. Horatii Flacci De arte poetica commentarius* (Venice, 1554), fol. 33r; *In Q. Horatii Flacci Venusini librum De arte poetica Aldi Manutii Paulli F.Aldi N.Commentarius* (Venice, 1576), 34 (both handily reprinted in one volume as *Poetiken des Cinquecento*, vol.19 (Munich, 1969)); E.Jacobsen, *Translation: A Traditional Craft* (Copenhagen, 1958), 47-51.

47 *Q.Horatius Flaccus*, ed. Denys Lambin (Paris,1567), 2, 359-61.

48 Mignault, note on Ars poetica 141; *Q.Horatii Flacci De arte poetica liber* (App. 1 below, no.16), fol. 5r: '*Dic mihi. Odysseas homericae principium est et propositio totius qua ex adiunctis et effectis Vlysses describitur.*'

何故ミグノーはランバンの注解から様式的部分を情け容赦無く刈り込んだのだろうか。それはコレージュ・ド・ラーンスでの彼の生徒がギリシャ語を知らなかったからか。そうでなかった事は明白である。彼はラテン語同様にギリシャ語の文献についても講義をしたし、彼の生徒も、少なくともメール（Mayres）は、ギリシャ語をはっきり理解して全文章を書き下ろすに充分には知っていた。同時に、ミグノーがランバンの方法が持つ利点を見る目が無かったという事も無い。事実、彼はギリシャの詩歌をラテン語に翻案することでは熟達していた。彼の説明に従えば、アルキアトに関する全注解は、「それぞれの象徴（emblem）の資料と起源をギリシャとラテンの関連する章句を集めて見極める事」[49] を目指していた。従って教える際にギリシャ語の匹敵する語句を避けたのは、意識的な教育学的な選択から出たに違いない。その選択について説明する事で、我々を彼の人格の核心に近付け、本当に特色のある、教師としての彼の方法が持つその主要点を指摘する事となろう。

ミグノーの『オード』3.1についての講義は、我々がこれまで論じてきた事とは全く異なる素材という一つの範疇を含み、余分な歴史的言語学的な事柄を省略したのは、明らかにこの素材の為に場所を空けたいと望んだからである。例として5行目に関する彼の注を取り上げる事としよう。

> Regum timendorum（王達の恐れる事の）は、曖昧な prolepsis（προ-ρρησιS 前もっての指示、予告）ではあるが、容易に、王侯は彼等に劣る者達、即ち彼等が統治する人達であり又彼等が自身を恐ろしい姿で臨んでいるそんな人達よりは遥かに幸せであると」人は言うだろうと、容易に解明されるその予告に従って a gradatio（ある種の連続した階梯）に着手する。実際にホラティウスは言っているが、王侯は、如何に情け容赦が無かろうと全能の神に支配され、神の支配からは逃れられない。彼はこの事を一つの例、即ち巨人族の例を導入して証明している。

ミグノーがここで、そして9、17、41行に関する注や、大抵の講義でも、行なっている事はと言えば、詩についての形式的な構造と論議に注意を集中させる事である。彼は、ホラティウスが表現しようと努めている箇所を確認し、それを表現する際に用いる論証の典型を分類する事を試みる。例えば、今引用した章句でミグノーの目を捕えているのは、命題を論証はしないが、数個の好例でそれを支持する事で更に確実にする、議論の弱い形態である修辞的帰納法のホラティウスによる使用である。同様に9行にミグノーが関心を持つのは、それが Est ut viro vir（人に対して初めて人になる）というギリシャ精神、即ちランバンが既に注目していたもの、を含むからではなく、それが同時にひとつの道徳的な論点を証明する形式的な比喩表現を次の様に用いているからである。「ホラティウスは好機の下にある物事に強烈な愛着を持って離れない人を、飽く事を知らず目が眩んだ強欲者と批判する。彼はこの事を、こういった事柄で自分自身を擦り切らせた人に付帯する事柄を通じて、4つの性質に関する修辞的帰納法により、論証する。」この詩についての最終的な注釈でも又、文学上の美点より寧ろ、それの持つ論争

---

[49] *Omnia Alciati emblemata*, 22: *'Id vero [Mignault's skill] maxime, nisi fallor, perspicuum erit in observando fonte et origine cuiuscunque Emblematis, in comparandis utrisque linguae auctoribus, qui magnum videvantur adferre adiumentum ad singulas notas et explicationes, ut denique in cumulandis iis locis, qui sparsim apud Alciatum in scriptis aliis prolixissimis habeantur.'*

的とか弁証法的な戦略を扱っている。それに彼の講義の大多数も同様に、話し終えた文学作品から議論の形式的な原理を抜粋する事を目指している。当時のミグノーにとって文学的な文献についての主要な関心は、弁証法の諸原理をそれらがどう適用しているかに置かれている。それを分析する事は、良い書き方の練習が出来るだけでは無く筋の通った論議を教える事でもあった。

ここで著しい例を取り上げれば彼の関心が結ぶ焦点の一貫性を示唆する事となろう。ホラティウスの最も多く引用されるローマのオードから、最も多く引用された詩の一行は恐らく 3. 2. 13 の、Dulce et decorum est pro patria mori（甘い香りと華麗さは祖国の為の死に対してある）である。ランバンが指摘する様に、この行は非常に多くの同様なギリシャの章句をほのめかし、最も著しく類似するものがティルタエウスにある。[50] ミグノーにとって、この行は議論がましい方策や、次の様な可能性のある異論の論駁と比べて、言葉の美しさの点で価値の少ないものである。

> Dulce et decorum（甘い香りと華麗さ）、ここでホラティウスは自分が言い表した事を確認すると同時に、困難な闘いによって直面するよりも逃走によって死を避けたかったと言うかもしれない人々によって提出される可能性のある異論を論駁している。[51]

この点で、ミグノーの注釈の弁証法的方法は飽迄意外性が無く、何処へ行こうと、どんなに豊富で変化に富んでいようと、簡潔で、一様で、圧縮した小さな纏まりで現われる。ミグノーは彼の釈義学的方法が大文字の M を付けた Method、あるいは、ある開講の講義の中で述べているように、一つの籠に彼の隠喩を見事な程奔放に総て抛り込む方法と理解される事を望んでいる。「それは自由学芸という大洋を横切る我々の道を明るくする一つの星と、混乱という迷宮から我々を導き出すアリアドネの糸を提供する。」[52]

1570 年代のパリで活動していた教師にとって、これらの方策は方法の一般的選択以上の事を表わし、それはラムスとラミストの教育体系への忠誠を語るものである。真実で自然な弁証法は一つであり唯一の形態である事と、この真実の弁証法は哲学者だけでは無く、雄弁家や詩人によっても採用されると認める事が、ラミストにとって重要な事柄である。[53] 哲学と雄弁とのこの同一性に対するイデオロギー的な傾倒が得られれば、偉大な古代の作家達が詩句を書く時でも、その弁証法をどのように採用しているかを示す事で、その各要素を教える事が、ラミ

---

[50] *Q.Horatius Flaccus*, ed. Lambin, 1, 145.

[51] Mignault, note on Odes 3.2.13 ; *Horatii Carmium liber III*, fol. 32$^{r}$: '*Dulce et decorum. Reddit rationem dicti et eadem opera occurrit obiectioni quae moveri posset ab his qui dicerent se malle vitare mortem fugiendo quam eam acriter pugnando oppetere.*'

[52] '*Oratio prima, De studio literarum recte instituendo, deque Academia Parisiensi ... Habita in schola Marchiana 6. Kalend. Octobris 1574*', in Mignault, *De re literaria orationes tres, habitae in Academia Parisiensi* (Paris, 1576), 17-18: '*Equidem AVD., methodem rem non tam levem aut exilem esse puto, in qua pene una studiorum omnium liberalium fructum iure statuo: ea enim efficit ut tenebras animo expellamus, et ordinem nobis certissimum prponamus, qui in hoc vasto disciplinarum liberalium Oceano nobis tanquam stella quaedam benigna praeluceat: aut ut filum Ariadnes, quo nos e labyrintho rerum implicatarum extricemus.*'

[53] For a pointed analysis of the earlier secondary literature on Ramus, see P.Rossi, 'Ramismo, logica, retorica nei secoli XVI e XVII', *Rivista critica di storia della filosofia*, 12 (1957), 357-65; on more recent works see Sharratt, 'The present state of studies on Ramus'. The present account follows for the most part W.S. Howell, *Logic and Rhetoric in England, 1500-1700* (Princeton, 1956); Jardine, *Francis Bacon*.

ストの原理の重点であった。[54] ミグノーの教育学の中心に、ラムスに対する彼の傾倒があり、どんな論争的な宣言や表明にも増して、教授についてのラムスの道が、彼を自由学芸についてのラミスト的見解に委ねた。(1572年8月のプロテスタントであるラムスの殺害事件前の緊張した数ヶ月間に彼がする講義から、ミグノーはラムスの方法より彼の名前に注目するのに気が進まなかったと十分考えられる。[55] 1599年の様な後になって、ラムスの伝記作家ナンセルは、彼の殺害事件について「より詳細に語る事は許されもしないし、望ましい事でもない」と書いた。と言うのも、その傷痕は事件の件では未だやっと癒されただけであるし、政治的動機についての記憶も呼び戻されるべきではないからである。)[56]

ミグノーの教授法は特徴として「ラミスト」のそれであるが、当時は大部分文法的歴史的という約束上の形式に従うものとなっていた。実態としてそれは、我々が見たラムス自身が王立コレージュ（Collège Royal）の最初の課程で採用した教授の形態と非常に似ている。ミグノーも又1577年に、主要なラミストの著作であるオマル・タロンの『修辞学（Rhetorica)』に彼が最初の詳細な注釈を付けた版を出版する事で、ラミストの出版ブームに自身で貢献した。彼のProoemiumの中で、考え出す事（invention）や配列（disposition）は推論の一般的技術という弁証法の部分とするのが正しいので、修辞学は伝統的な3か5の部分即ち発声法・演説法（elocution）や宣言・言明（pronunciation）の部分でだけ扱われるべきであるするラミストの方針を論じている。[57] そして彼は明白に「詩、論争、歴史の構成部分とか、その一部にせよ全体に及ぶにせよ、内容の配列を論じ」なければならない人は、「配置に関する弁証法的情報源」を用いるべきであると述べている。[58] この著作の終りに、彼は典型的なラミストの方策、修辞法の技術と、ひとまとめになった二分法に適切に配置されたその細別とを含む表を提供してい

---

54 Ramus describes his method as follows: '... *eademque et analyseos et geneseos exercitatione, Demosthenis, Homeri, Virgilii, Platonis, Aristotelis dialecticum et ex argumento consilium, et ex syllogismo iudicium, et ex ordine universae collocationis complexum interpretando, meditando, scribendo, declamando perpendimus, imitamur ...*'. *Pro philosophica Parisiensis Academiae disciplina oratio* (Paris, 1557), fol. 17r. And he explicitly argues that a child will find it easier to learn dialectic from the literary texts that he already knows than from Aristotle's rigorous, formal terminology ('*Omne b est a*' and the like): '*Virgilianis igitur et Ciceronianis, id est, humanis et popularibus exemplis idem facientibus potius, quam illis abecedariis figmentis utar*' (ibid., fol. 27r).

55 On Ramus' death, and the political climate surrounding it, see Waddington, *Ramus*, 243ff. ; Ong, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*, 28-9.

56 Cit. P.Sharratt, 'The present state of studies on Ramus', 201.

57 Mignault, '*Prooemium in hanc Technologiam Rhetoricam*', *in Audomari Talaei Rhetorica e P. Rami praelectionibus observata, una cum facillimis ad omnia praecepta eiusdem artis et exempla illustranda, commentationibus, per Claudium Mineoem* (Frankfurt, 1582), 12: '*Nam praeter ornatum verborum et pronunciationem, nihil est ad artis hujus perfectionem somniandum. Quas partes duas ita commode parique brevitate digessit* [*scil. Talon*], *et postremo exemplis tam selectis et elegantibus illustravit, ut veram hanc et propriam, universalem inquam, et Philosophica descriptam methodo artem ausimus appellare. Neque vero fuit, cur in artis confectione* (*quam propriis et naturalibus praeceptionibus instituebat*) *de Inventione, deque Dispositione quicquam praeciperet: has enim partes esse Dialecticae proprias intelligebat, quae sua in arte, non in aliena, docendae potius, quam confusa quadam praeceptionum farragine permiscendae videbantur.*'

58 Ibid., 18: '*Nam si de poematis cujusdam vel disputationis, aut historiae partibus tractandum sit: earumque rerum omnium oeconomia et dispositio ex partibus aut integris* (*ut nominantur*) *aut etiam universis examinanda sit, non erit ars quaedam nova fingenda. Etenim Dialectici fontes de disponendo sunt puriores et apiores ad intelligentiam memoriamque juvandam, quam rivuli excogitati a Rhetoribus: quos quanquam non penitus aspernemur, eos tamen non eo habemus in numero, ut cum fontibus illis doctrinae generalis et universae conferamus.*'

る。[59] ラムス自身の注釈から直接借りて自分の講義に受け入れたりして、ラミスト陣営に対するミグノーの提携について更なる証拠がある。キケロの『カティリナ弾劾 I (Catilinarian I)』についての彼の講義の初めで、ミグノーは次の様に述べる。

しかしながら我々が最初に指摘すべき事は、この演説の一般的な話題がカティリナはこの都市から追放すべきか、それとも死罪とすべきかである。この事が国家に及ぼす有害な付随事項と影響の点から次の様に論じられる。

悪質な市民とされる者は殺害されるべきである。
ところがカティリナは悪質である。
それ故にカティリナは殺害されるべきである。[60]

それ自身講義に由来する、同じ演説についてラムスの注釈の書き出しはこうである。

人間にとって致命的な事柄を三段論法の形式にした緒言の梗概は次の文章を含む。

凡そ悪質な市民は死をもって罰せられるべきである。
カティリナは悪質な市民にあたる。
それ故にカティリナは死をもって罰せられるべきである。[61]

さてここ迄来ると、ミグノーの「方法」についてかなり明確な像を描く事が出来る。「彼が言うラミズムの第一条理の前に立つ時に、彼の教育関心の焦点は弁証法であり、納得でき合理的な議論に向けた 16 世紀の技術であった。これを彼は自分の生徒に普遍的な合鍵として提示し、それが正しく適応されるならどんな鍵でも開けてしまう事を繰り返し繰り返し見せている。[62] 文書を分析する際にその様な迫り方が持つ知的な可能性について我々は余りに軽蔑的になりがちであるが、その前にミグノーのラミストとしての方法がより伝統的な方法では欠けていた多くの美点を示す事を認めるべきである。

---

[59] Ibid., ad fin.:'*Tabula in Aud. Talaei Rhetoricam, studio ac labore Claudii Minois conscripta*.' This divides *Rhetorica* into *Elocutio* and *Pronunciatio, Elocutio* into *Tropus* and *Figura*, etc. On the origin and spread of the vogue for such tables see K.J. Höltgen, 'Synoptische Tabellen in der medizinischen Literatur und die Logik Agricolas und Ramus', *Sudhoffs Archiv für Geschichte der Medizin und der Naturwissenschaften*, 49 (1965), 371-90. On Mignault's edition of Talon see also L.Terreaux, 'Claude Mignault, commentateur de la 'Rhetorica' d'Omer Talon', *Acta coventus neo-latini turonensis, Université François-Rabelais, 6-10 Septembre 1976*, ed.J.-C.Magolin (Paris, 1980), 2, 1257-67.

[60] Mignault, introductory note to Catilinarian I; *M.T. Ciceronis in L.Catilinam Invectiva oratio prima* (App. 1 below, no.8), verso of title page: '*Sed primum debemus observare quae sit generalis quaestio huius orationis nimirum utrum Catilina eiciendus sit ab urbe vel necandus quae ex effecis adiunctisque reipublicae pestiferis hoc modo disseritur. Penitiosus civis occidendus est. Catilina est pernitiosus. Catilina itaque necandus est ...*'.

[61] Ramus, *In Ciceronis Orationes praelectiones*, 233 (a commentary first published in 1553): '*Summa prooemii in hunc ex adjunctis personae syllogismum inclusa, sententiam hanc continet:*

*Perniciosi cives sunt morte multandi:*
*Catilina perniciosus est civis:*
*Catilina igitur morte multandus*.'

第一に、それはボルガーが我々に「ブリコラージュ」、即ち優雅な詩句と類型的な項目とを互いに配列する事と、呼ぶように勇気づけ、我々が直ぐ前の章で見たように、人文主義者の学芸教授法を特徴づけるようになった、その事では無く、むしろ秩序だった思考の訓練であった。[63] この故に、それは公共的な世界における特別な訓練を要する様々な職業にとって意味ある準備であり、その世界では明晰な頭脳と敏捷な精神が純正なラテン語の流暢さと同等と見なされた。ミグノーの学生達は恐らく司祭や教師になったり officiers（公私の職務）に就いた事であろう。彼の選択眼のある教授技術は、彼等が文学作品を通して思考の訓練を受けた通りに、彼等が公共の場で立ち上がってある事例を論じ、説教文を作ったり政治の覚え書きを起草したり、状況を考えそれに見合った行動計画を策定する準備をした。その大きさに対して、素晴らしく文学的な箇所の扱いでミグノーの注釈上の失点は、彼の学生である顧客や彼の卒業生にとっては将来の雇用者によって彼等の勝ち点と見なされたとして良いだろう。

第二に、ミグノーの方法は伝統的な方法とは異なったが、伝統的な方法が産み出す講義は教師の知識と経験の蓄積と共に体系的に首尾一貫して再現できた。以前には、文献について語法、様々な隠喩、他の文学的側面に主として関心を持った伝統的な教師が一連の講義を改善したい時には、多くのギリシャ語やラテン語の類例を引用するという蓄積によるか、個々の定義を全文の辞書解説にするか、統語論や韻律論の総ての点で徹底的に論ずるか、類似の事で改善するしかなかった。我々が見て来たように、その様な扱いの過程では文献自体が完全に視野から消え、文献はアルファベット順に並んでいない百科事典を作成する為の口実よりも悪い文学作品となってしまう。[64]

それに対して、彼の方法がそれを適用する文献にぴったり合う事を示すミグノーの戦略は、彼の講義の都度それの適用を吟味しなければならず、いろいろな角度からの検討や相関させる事の結果として得られる過程が彼に分析自身を鋭敏にし洗練し、彼の方法が彼の前にある文献にとっていよいよぴったりと相応しいものとなる事を意味する。一例を挙げれば、ホラティウスの書簡 1. 20 の講義において、ミグノーは彼の方法をあっと言わせる様な鋭さで適用した。

---

62 Like Ramus himself, Mignault dose in fact make it clear that this approach to logic is specifically tailored to arts teaching, and that although he believed that there was a single true 'ars disserendi', philosophers do in fact argue more rigorously than poets. His lectures on the *Compendium in universam dialecticam, ex Rivio aliisque recentioribus collectum* (App. 1 below, no.26) cover syllogistic as well as enthymeme and induction (though the figures of the syllogism are not treated in much detail). Cf. his introductory remarks: '*Quid sit discrinimis inter dialecticam et logicam. Vniversa disserendi ars apud Aristotelem instruit ad tractationem quaestionum singularum omnisque doctrinae perpetuitatem quae propria methodi indeque ab interpretibus organum logicum itemque ars artium nominatur. Et quoniam quaestionis cuiuscunque tractatio ac methodi perpetuitas in omni re duplex esse potest, una popularis ad eorum cum quibus agitur imbecillitatem accommodata, altera exactaphilosophorum propria, idcirco huius artis (si modo haec una ars apud Aristotelem vere dici potest) duae partes ut novae artes extiterunt, una Topica, altera Analytica, quae multa quidem inter se habent communia, sed finibus ita distinguantur ut illa opinionis effectrix, haec vero scientiae procreatrix esse dicatur: utraque tantum communis quia usu suo per omnia rerum genera diffunditur, etiamsi in argumentis hoc intersit quod Topica sit eorum probabilium ad disserendum in partes contrarias, Analytica (cui demonstrandi ratio est subjecta) necessariorum tantum et eorum quae uni parti questionis sunt asddicta, et denique propria ut philosophus arte Analytica instructus ex propriis agere dicatur, dialecticus vero ex communibus ... quanquam utraque ars communiter sit omnium quaestionum tractandarum, quia tamen non est in omnibus idem tractationis modus, idcirco ab Aristotele in utraque arte quaestionis divisio est ut eius formis distinctis accommodaret etiam distinctum tractationis modum.*'

63 R.R. Bolgar, 'From humanism to the humanities', *Twentieth Century Studies* 9 (1973), 8-21; L.Jardine, 'Humanism and the sixteenth-century Cambridge arts course', *History of Education* 4 (1975), 16-31.

64 Cf. A.Grafton, 'On the scholarship of Politian and its context', *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 40 (1977), 152-5.

これは彼の本の持つ擬人法（prosopopoeia）によって、ホラティウスの謙虚さと謙遜を述べるが、公表される事を望んだ為にこの擬人法を彼は譴責している。[65]

これはホラティウスの本を受けとる際に、気取った懐疑論を本当に真面目に取ることである。そして彼自身も後年この事を明瞭に認めた。それはこれの後の講義で次の様に付け加えているからである。

これは自分の本が出版されるのを思い止まらせる努力の様に思われる。しかし彼はこれをどちらかと言えばこそこそと狡賢くする。と言うのは、彼についてその事が問われる時は、それに対して彼を在るが侭に述べるべきであると、後にホラティウスがその本に注意を与える時には、的確に褒め称えられ彼が受けるに値する称賛を得たいと望んでいるのである。[66]

ここで付け加えられた書き込みは、確かに読書の質を更に高める仕方で、その議論を適切な文脈に入れる。キケロの『ラビリウス弁護（Pro Rabirio)』についてしたラムス自身の講義の場合、その印刷された注釈は学生のノートの隅々にまで、焦点について同一の鋭利化と改善を表わしているという事実が、これが本当にラミストの聖書評釈的方法の一種固有な特徴（an intrinsic feature of the Ramist exegetical method）である事を示唆する。[67]

プリンストン大学所在の資料は小さな地方の例を提供するが、それは比較的大した事の無いコレージュの若者の一年間に亘る記録である。ところが、1574年に恐らく、アウソニウスの『グリフス』に関して彼の校長がした、適切な学芸の教育にとって浅薄過ぎる文献という批判にうんざりしてミグノーは比較的良く知られたCollege de la Marcheに異動した。[68] そこで彼は少しゆったりできた様に見える。いずれにしても彼は後に「College de la Marcheバシレイウスの演説青年達に向けて（Ad adulescentes)」について公開講義をした時に、学生に有益な書物を選定する時の「豊富で役立つ」問題を討議した――これはラーンスでしていたよりギリシャ語の文献について更に入念な講義を暗示する叙述であるが――と想起した。[69] そして

---

65 Mignault, introductory note to Horace, *Epistles* 1.20; *Q.Horatii Flacci Epistolarum libri duo* (App.1 below, no.17), fol. 19$^{v}$: '*Modestia pudorque Horatii describitur per prosopopoeiam ad librum quem obiurgat, quod cupiat in lucem emitii, simulque adiungitur Horatii descriptio ex variis adiunctis.*'

66 *Q.Horatii Flacci Epistolarum libri duo*, ed. Mignault, (Paris, 1584), 117: ('*In epistolam vicesimam Methodus*'): '*Videtur esse dehortatio ad librum suum, qui in lucem edi cupiat: pericula enim recenset, quae editionem sequi possunt. Id tamen caute admodum facit. Nam cum subinde monet, ut si rogetur liber de conditione personae Horatianae, describat eum uti sit: nihil aliud vult quam seipsum tacite commendari, et meritis ornari laudibus. Ad eum pene modum alii quidam poetae, sed Ovidius et Martialis imprimis, libros alloquuntur suos, vel uti se tecte laudent, aut etiam vindicent a contemptu vel odio invidorum.*'

67 For the parallel account of the development of Ramus' commentaries see Barroux, 'Le premier cours de Ramus'.

68 The date of Mignault's move is determined by the 'Oratio' cited in note 52 above. For Mignault's problems with his principal at Reims see his '*Appendix apologetica pro Ausonii Gripho*', dated Paris 1575, in Mignault ed., *D. Magni Ausonii Griphus ternarii numeri* (Paris, 1583), fols 26$^{r}$ (misnumbered 29)-29$^{r}$.

69 *D.Ausonii Burdegalensis, Viri consularis, Eidyllia duo;unum,Protrepticon ad nepotem Ausonium, De studio puerili; alterum, De ambiguitate eligendae vitae; Quibus adiecta est facilis et aperta explicatio, ex praelectionibus quotidianis Claudii Minois. Excepta omnia ex ore docentis, a studiosis aliquot qdolescentibus in Academia Parisiensi, anno MDLXXV*, ed. Mignault, (Paris,1583) [The title is given in full because it is unusually informative], fol. 12$^{r-v}$ *ad Protrepticon 45: 'Sunt enim veteres in primis deligendi, non quidem omnes, sed probatissimi, ex quibus solida paratur eruditio. Ex recentioribus sunt nonnulli minime aspernandi, sed ii maxime qui foeliciter veteres illos aemulantur. Quod argumentum certe copiosum et utile admodum studiosis, quia memini me pluribus tractasse, et illustrasse anno superiore, cum in Marchiano publice orationem Basilii magni pros neous explicarem, hic non ero longior.*'

1575年にブルグンド地方教師（regia Burgundionum schola）の光輝に登る時に、彼は猶その先に進んだ。[70] 1575年に為されて後に彼の学生によって出版されたミグノーのアウソニウス「プロトレプティコン（Protrepticon)」に関する講義は総ての点で詳細さの希な完全さを示す。ミグノーはジョセフ・スカリガーの非常に新しい版から、アウソニウスの innumeros numeros（48行）は「恐らく足でそれも締まらない足取りで進む様な喜劇の自由な韻文」であるという発見を抜き出した。[71]

（未完）

---

[70] For Mignault's move to the Collège de Burgogne see his '[*Oratio*] *Altera. De causis quibus maxime Parisiensis Academia periclitetur; et qua via imprimis eidem subveniri posse videatur. In regio Burgundionum gymnasio,pridie Kalend. Octobris 1575', De re literaria orationes* 42-75, esp. 72-3.

[71] *Ausonii Eidyllia duo*, ed. Mignault, fol. 13r: '(*Innumeros numeros*) *solutos Comoediae versus: quae quidem pedibus incedit, sed solutioribus, neque lege vinctis adeo severa, ut sunt alia poematum genera. Quam explicationem debeo Iosep. Scaligero viro doctissimo* ...'. The relevant passage from J.Scaliger, *Ausonianarum lectionum libri duo* (Lyon, 1574) is: '*Intelligit enim solutos comoediae versus: qui sunt quidem numeri: nam suis pedibus incedunt, sed non veri numeri: quia legibus soluti. Ita Horatius cum scribit: numerisque fertur Lege solutis: intelligit haud dubie innumeros numeros' Pindari. Eiusmodi autem est, imo liberior comica poesis. Quare et in Epitaphio Plauti per innumeros numeros Comoedia intelligitur, Nam quid aliud scripsit Plautus praeter Comoediam* [cf. Aulus Gellius, Noctes Atticae 1.24 for Plautus' epitaph] ? ... *quod dictum est Graecanice. ut* numphê anumphos, gamos agamos.' (2.17, 134).